

恵みを待ち望む生活

今朝はペテロの手紙の三つめの単元「聖なる生活をしよう」という箇所を聴いてゆきます。最初に、ものすごく大切に基本的なことを確認しておきたいと思います。親から買い物に行つて来てと頼まれて、買い物に必要なお金を渡されないことがないように、聖書で「～しなさい」と命令が語られるときには、それはすべて神さまからの招きと受け取るべき事柄です。買い物に譬えましたが、わたしたちにある使命、ミッションが与えられるとき、それを成し遂げるために必要な備えや手立てはすべて神が備えてくださる。この神の恵みのご支配への信頼が必要です。神は決してわたしたちを空手で送り出すことはなさいません。必ず約束の御言葉があり、示しがあり、その上でわたしたちが指し示されたことに従って生きることが願われています。この順番は決してゆるぎません。そして従うなかで、わたしたちは神の恵みや慈しみを具体的に体験することになります。今朝与えられた箇所であれば 13 節冒頭にある「だから」という言葉は、これに先立つ喜ばしい知らせ、「生き生きとした希望」をキリスト・イエスを通して、「ディアスポラでパレピデーモスな人々」＝「離散した仮住まいの人々」に与えられた神の恵みに根拠をもっています。これは神がなされた約束です。天にある朽ちることも汚れることもしぼむこともない復活の希望、新しく生きる希望が備えられているのだから、この約束、生ける希望を目当てに、あなたがたは地上の生き方を整えてゆきなさい。神があなたがたを信仰を通して守っておられるのだから！という招きが、ここでペテロから小アジアの各地に散らされた信仰によって難民となった人々になされています。ペテロの手紙を読んでいくにあたって幾つかキーワードを示していますが

そのひとつが「ディアスポラでパレピデーモスな人々」だと申し上げてきました。「散らされた・離散した」を意味するディアスポラ、この言葉は「ディアスポラのユダヤ人」という歴史的な専門用語にもなっています。この出来事はナザレ人イエスを主と告白したことによって、ユダヤ人のコミュニティから追放された初代のキリスト者たちにあてはまります。またユダヤ戦争の結果、神殿を破壊され、各地に散らされていくことになるユダヤ人を指すようにもなります。続くパレピデーモスという言葉「パラ・エピ・デーモス」という合成語ですがデモクラシーの語源ともなっているデーモス＝民ですね。パラは英語でいうと「by」にあたる前置詞、バイ・ザ・リバー＝川のそばとか、川の傍らでというような意味、ここから「かたわらに置かれた民」を意味し、これを「仮住まいをしている民」と新共同訳聖書は訳しました。これがわたしたちイエスを主と信じて生きる者たちの上書きされた、書き換えられた新しい現実であることを弁えたいと思います。この地上において、わたしたちは仮住まいをしている存在だということ、わたしたちが自分のものだと思っているものも元をただせば神さまに貸し与えられたものであり、一時的にレンタルしているようなものです。そして、わたしたちには目指すべき本当の住まいがある、移動中の身なのだという理解ですね。キリスト・イエスも、あなたがたのために場所を用意したら戻ってきてあなたがたを迎えると、わたしたちに天にある住み処を約束されています。パウロの言い方を借りれば、わたしたちはキリストを通して、天に市民権をもつ存在とされている。それは全く新しい命と新しい財産を約束された生き方として、わたしたちにこの世で終わるのではない、新しく開かれた望みを示しています。だから、それに備えて、応えて、聖なる生活をしよう、という招きがなされるのです。

福音に従って、応答の生き方が、与えられるものの大きさ、素晴らしさに応じた歩みが願われている。ここはそういう勧めなのです。

この生ける希望を示された者の生き方について、わたしたちの歩みはどうか、ここのところ考えています。きっかけは新型コロナウイルス感染症問題と音をたてて回り始めた世界秩序の武力による再編成の動きです。教会学校通信にも今回、そのあたりを少し書いたのですが、前年度踏襲というかたちの教会生活のあり方が、コロナによって中断されたように、そうした信仰のかたちがもう出来なくなる。危機の時代に明らかに足を踏み入れたと感じています。ペテロの手紙の読者たち、「ディアスポラのパレピデーモスな人々」に向けて書かれた手紙と対話しながら、キリスト者とは何かを考え、さまざまな状況に左右されない天に蓄えられている朽ちることも汚れることもしぼむこともない資産に目を留め、神の約束の言葉に聴き従いながら生きることの大切さを分かち合いたいのです。わたしは御言葉によって人格と人生と共同体を形作ると言い方をよくします。ただ聖書の時代と現代のわたしたちの生きている時代の社会状況の違い、ふつう歴史的制約といたりしますが、簡単に比較できない部分も存在します。しかしそれでも人間が人間である以上、違っているよりも共通している部分のほうが圧倒的に多い。人間の本性にかかわる部分で神の言葉はわたしたちの真実をつらぬく鋭さを持っています。この部分はゆるぎません。わたしたちはイエス・キリストの福音を受け入れて、アーメンと応答して、洗礼を受けて神の子とされた。そうして救われた自分をどのように理解し、日常生活の中に反映させているでしょうか。新約聖書の手紙を読む醍醐味というか、大切さは、この救われた者の生き方を問うところです。そしてこれは自らを願

みて、戒めつつ思うことですが、クリスチャンになることは決してゴールではありません。そこから天を目指しての歩みが始まってゆくのです。しかもそれは一人で到達できるものではなく、神に背くこの世のあり方、目を奪うさまざまな欲望に対抗しながら共にキリストの教えに従う共同体を形作ることによって成し遂げられてゆく。ともどもにキリストのみ足の後を追う生活を通して、わたしたちの教会でいえば、感話を通して、それぞれがどのような課題に向き合い、神の導きや助けによって救われたか、御名を崇めたか、また今与えられている課題に途方にくれたとしても神の約束に目を留めつつ、ともに祈られて担われて、また課題を生きる明日の力が与えられてゆく。そうやって、主が与えられたあなたの召しに向かって生きる、招きに応じてゆく。それらは「聖なる存在になりなさい」という言葉でまとめてよいものなのです。それは具体的な行動への招きです。わたしたちは外から見れば、こうして礼拝を守るキリスト教の信者です。信徒でもよい。しかし、聖書を読むとはっきりと書いてあるのですが、イエス様はご自分に従う者たちをいつも弟子と呼んでおられるのです。信徒という、信じている者という心のなかで信じているということから始まって、信じていることが具体的にキリストの言葉と心を生きることで、わたしたちの生活を主に従う者へと整えてゆく。召してくださった方の御心を実現する「弟子」としての心構えに生きているかということとは絶えず問わねばならないとこの手紙を読んで改めて思われました。ともすればわたしたちは自分自身の地上の課題や、富や関心に引きずられて天に故郷をもつ寄留者であることを忘れてしまうからです。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて

守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。そう主イエス・キリストは命じ、約束されました。これは大宣教命令と呼ばれるマタイによる福音書の最後に記される主の招きです。ここでも「弟子にしなさい」と主は言われています。そのことを念頭において、ペテロの手紙の13節以下を見ますと、約束された「生き生きとした希望」の素晴らしさに向かって生きるための心得が述べられていることがわかります。「だから、いつでも心を引き締め」とありますが、この「心を引き締める」という言い方は聖書ではここにしか出てこない珍しい表現です。ようは腰に帯をギュッと締めて服がだらんとしないようにする。仕事に取り掛かる前に必ずする準備のような、日本ふうにいうと、心にたすき掛けをするという感じでしょうか。そうやってイエス・キリストの恵みが現れる支度をして待ち望む。そこに望みのすべてを賭けて身を向けてゆく。なぜならば彼ら、そして、わたしたちはすでに選ばれているからです。召し出してくださった聖なる方にならって、あなたがたも聖なる者となりなさいと勧められます。このあたりは聖書では「キリストを着る」という表現が用いられます。さきほど衣服の帯をぎゅっと締める珍しい言葉が使われていると言いましたが、召された者たちはキリストの血によって贖い取られた。イスラエルの伝承の過ぎ越しの子羊の例にならえば、柱と鴨居に塗られた子羊の血、すなわち命の代償に死から救われた。同じように、キリスト・イエスの十字架によって罪を赦され、復活の希望に与り、この祝福に洗礼によって結び付けられ、信仰によって守られているわたしたちは、召しだされて、キリストを身にまとっている。着ていると理解して良い。だから心にたすき掛けをし、召される以前の、無知であった頃の欲望に引き回されることなく、主の教えに従順となり、生活のす

すべての面で聖なる者となることが願われているのです。「聖なる者となれ」という表現は受け取り方に注意しないと、ファリサイ派のように、自分と他者を比較して、相手を軽蔑することによって自分を高くしようとする誤りに陥ります。これはそうではない。わたしたちが自分をみずからの判断に従って評価する、相手を裁くものさしは、キリスト者の生きる基準とはなりません。聖書において聖なるとは、ここで「召し出してくださった聖なる方に倣って」とありますように、神さまご自身が愛と憐れみによって選んで下さっている。わたしを召し出して下さっているという、神さまの側にすべての主導権がある出来事なのです。救いが恵みであるとはこのことを指しています。不思議なことに、神はわたしを召して下さった。そのことによって、わたしは「取り分けられた者」とされている。聖なるとは「区別、距離」を指す言葉を語源に持っていますが、神が特別な使命のために取り分けられたことによって、キリスト者は生まれるのです。だから、選ばれた者、召し出された者は、呼び出されたことの意味を召し出して下さった方に問いかけながら生きてゆきます。この意味で「いつでも心を引き締め、身を慎み」とある表現が心にたすき掛けをすること、キリストを着る、その教えを身にまとう表現として理解してよいことをもう一度、心に留めましょう。信じる者は、従う者、わたしの命じておいたことをすべて守るように、と言われた主の教えを身にまとい、口ずさみ、賛美しながら生きる者だとペテロは書き送りました。この消息に従って、主の弟子としての歩みを整えたく願います。その備えは、主ご自身がしてくださいます。

お祈りいたします。